



(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

恋は心でするものだ、とか、恋は肉体でするものだ、といった通念に対して、恋は「言葉」でするものだ、と考えてみよう。

思いではなく言葉。おそらく「思い」より「言葉」のほうが具体的な物に近いのだ。話された言葉は、口や耳という身体性に強く結びついていて、書かれた言葉は、それを書いた手や、それを読む人の目を喚起しないでおかない。

紫式部が『源氏物語』を書いた千年前ならいざ知らず、近頃ではラブレターをつくづく眺めて、その筆跡（手）をたどるなどということは絶えてしまったが、パソコンの液晶画面の手紙や電話の声、そういう<sup>(7)</sup>バイタイを通した「言葉」に、恋人の身体性を感じる、ということがある。

実際、恋愛はどのようにして始まるか、と考えてみると、彼ないしは彼女に電話するときから始まる、というのが、もっとも一般的なケースではないだろうか？

そして電話のなかで行き交っているのは、「思い」でもなければ「肉体」でもなく、「言葉」なのだ。限りなく「思い」と「肉体」に近い「言葉」なのだ。

いや、ときには言葉は肉体や思い以上に恋の実質を伝える場合がある。デュラスの『船舶ナイト号』では、電話だけで結ばれた恋人たちが、互いの顔を見ないことによって類いまれな恋を持続させる。この恋人たちにとっては、相手の写真を見るときの、恋の終わるときなのである。

顔を見ない恋。なるほど『源氏物語』で匂宮は相手の姿かたちを一度も見ないうちから、よきライヴアルの薫からうわさを聞いたただけで八の宮の姫君に恋し始めているようだ。プルーストも恋愛において実際の相手が占める割合の少なさについて語っている。『源氏』やプルーストの恋人たちは相手の存在より、むしろその不在——幻を相手に恋をしている。逃げ去るものだけが彼らの恋の対象なのか？彼らにとって恋人とは「X」に似たものなのだ。

だからといって、電話の恋人たちをプラトニックなどと言うことはできないだろう。電話で愛を語る二人はどんな肉体の愛を共有する恋人たちより、よほど恋の深みにはまっている。言葉しか交わさないように見えて、かろうじて口づけだけを交わす『モデラート・カンタービレ』のアンヌ・デバレードが、デュラスのヒロインのなかでも飛び切り淫らな不倫の女に見えるように。

言葉を精神的、抽象的なものだと思うのはやめよう。アンヌは言葉で姦淫しているようだし、恋人の言ったなにげない言葉に、その

肉体に対する以上の、なまなましい肉感を感じている。とりわけ、恋の始まりにおいては、ある一言がその恋の命運を決する力を持つ。

( a )、恋が電話で始まると言いたいわけではない。電話の前に二人はいつかどこかで出会っていないてはならない。初めての出会いというものが、なければならぬ。

初めての出会い……。とはいえ、彼ないしは彼女と初めて出会ったときというものは、どのようにして画定されるのだろうか？それが初めての出会いであると知るためには、その出会いが恋につながるものであることを知らなければならず、その恋につきものの多くの物語が後に続かなければならない。「初めての出会い」などというものは毎日のようにあるのだから、それが「あのひとの」初めての出会いになるかどうかは、出会いの過程にあつてはとうてい予測しがたいものなのだ。

( b )、ある出会いが「初めての」出会いであると知るためには、それを後から振り返って思い出す必要があることになろう。「初めての出会い」とは事後的に確認される類いの出来事なのだ。そしてこの回想、この確認は、「言葉」なしでは行ないえないものだ。「あのとき、あんなふうにして、初めて彼(彼女)に会った」——そう自分に語りかけることによって、恋の始まりとしての最初の出会いの場面は構成される。

<sup>A</sup> 事後的に構成される——そう、言葉によって構成されるのだ、恋の場面が。一篇の小説か、舞台上で演じられる<sup>(イ)</sup>シバイのように。この場合、登場人物(役者)は恋し始めた自分であり、読者(観客)も自分の、一人シバイであるのだが、この読者、あるいは観客は、他の多くのいわゆる「世間の目」を代表すると考えるべきだろう。私は世間の目に成り変わって自分自身の恋を「読む」のである。この回想のなかに恋の始まりはあつたのかもしれない。

きわめて私的なものと思われがちな恋愛の、公的な側面に注目しなければならない。

公的な面とは、恋愛を秘すべきもの、罪あるものとして咎めるまなざしであると言っている。恋する者は自分の恋を許していない。自分は悪いことをしている、してはいけないことをしているのだと自分に言い聞かせている。恋とはしてはいけないことをする欲びに他ならないからだ、そのように掟を立て、その<sup>(ウ)</sup>シンパンがなされることによって、恋は一篇の小説のように構成される。

さらに言うなら、恋の始まりは「初めての出会い」のなかにあるのではなく、それを事後的に構成する「言葉」のなかにあると言うことさえできそうである。( c )、言葉によって再構成されない限り、最初の出会いがあつたということの確認は不可能なのだから。そのような、「事後的な」回想は、恋愛が終わってからではなく、恋愛の進行中に、それも最初の出会いがあつて間もない頃に行なわれることがある。

つまり、恋愛では事態の進行と、それを事後的に物語化する回想が、互いにその切先を繰り出す剣の刃のように競い合って進む。恋愛がはげしいものであればなおさら、その（甲）は白熱したものになる。

最初の出会いの最中に、これが大きな恋愛の最初の出会いになると、確信に近い感情を抱く場合がある。そんな場合でも、一つの出会いを「最初の出会い」であると知るためには、それをすでに過ぎ去った過去のこととして見る必要がある。「最初の出会い」という事件の渦中に、それを「最初」と見る事後のまなざしが介入しなくてはならない。そんなとき「最初の出会い」は、それがまだ「最初の出会い」になることを知らない状態と、すでに「最初の出会い」であることを知った状態と、二つの時間帯に分割される。

一瞬のうちに燃え上がる恋であっても、その一瞬を言葉以前と言葉以後に分かつ切断の線が入らなくてはならない。さもなければ、一瞬のうちに燃え上がる恋は知覚されることなく過ぎ去ってしまう。プルーストは言う——「どんなふうに一人の女を愛し始めたかを思い出そうとすると、人はすでに愛し始めてしまっている」と（『囚われの女』）。恋とは、回想と、そして知覚の問題なのだ。恋とはざりざりのところで知覚される感情であり、この知覚は言葉によって行なわれるしかないのである。

というのも、人に知られない恋愛というものは存在しないからだ。もしその恋が人に知られないものであるなら、どのようにしてでも恋する人はこの恋を人に知らせずにいられない（この「人」は、恋する当人、恋の相手、仲のよい友だち、夫、妻、誰でもよい）。それが恋の告白というものだ。そして恋はこの恋の告白と不可分の関係にある。

告白することによって恋は始まる。告白が、言葉が、恋には絶好の（乙）になる。人は昨日会った人とのことを思い出し、自分に物語り、反芻しているうちに、恋を始めている。恋は言葉のうちに生まれ、言葉をすみかとし、言葉を食べて育つのだ。

秘密のうちに人に知られる、というのが恋の理想的な境地なのだ。「隠していることが見えなくてはならぬ *il faut que cacher se voie*」とロラン・バルトの『恋愛のディスクール・断章』にある。観客を前にして舞台上演じられるように進行しない恋愛というものはない。それは人目を忍ぶ秘密の恋であっても、そうなのである。

『モデラート・カンタービレ』の小さな田舎町の社長夫人アンヌと工員のショーヴァンの恋が、どんなに町の人々やカフェの女主人や客たちの視線の網の目のなかで繰り広げられるかを見られたい。アンヌの不倫の恋はそれらの視線によって生み出される、と言ってよいほどなのである。二人の恋を禁じる視線が、彼らの劇に不可欠な（カ）キワリをなしているのだ。映画化された『モデラート』では、「私の周囲には何という見張りが…… *Quelle surveillance autour de moi*……」とこういうアンヌの嘆きのせりふがジャンヌ・モローによって呟かれる。この見張り *surveillance* は恋人たちによって（カ）イみ嫌われるものであるが、また恋に必要なものとしてひそ

かに要請されてもいるのだ。

盲目と言われる恋愛の空間には、このように数限りない監視の視線が張りめぐらされている。そしてこの監視の視線の中心には、恋する当人の見張りの視線がある。生まれればかりの恋をもっともよく監視しているのは、誰であろう、恋する人自身なのだ。

恋する人は目を見張って自分の恋を見つめている、たとえ夢のなかで目を見ひらいているにすぎないとしても――。

一つの恋が生まれると、同時にそこに数多くの視線が生まれる。恋はこの視線の網の目のなかでしか生息できない不思議な生き物である。それは噂やゴシップ、スキャンダルを生む土壌になるのかもしれない。

恋愛小説を読み耽る人は、小説のなかの恋する人とそうした視線を共有するのである。というのは、小説のなかの恋する人も、彼ないしは彼女自身の恋物語を読んでいるからなのだ。彼ないしは彼女自身の恋と、その恋物語の区別はつけられないからだ。

言葉と恋の区別はつけられないからだ。

恋愛とは、言葉と恋――知られることと知られないこと――の境界を行く、危険な綱渡りなのかもしれない。

ある出来事を、その意味をまだ知らない状態とその意味を知った状態に分かつ、そんな境目で恋愛は「言葉」をもっぱら使用する。というより、その境目で起こることが恋愛という出来事であり、そこでは言葉以外の何ものも生起していないと言つてよいのである。

言葉はやがて物語になるかもしれない。大きなロマンスに発展するかもしれない。しかし、とりあえずは言葉である。物語になるより、言葉にとどまるほうが、恋はそのエッセンスを純粋に保つ。ちようど、多くを語る以上に、その人の名を呼ぶことが、一瞬のうちに、その人への愛を打ち明けることになるように。

(出典 鈴村和成『愛について』より)

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

- |     |      |    |    |    |    |    |
|-----|------|----|----|----|----|----|
| (ア) | バイタイ | ①態 | ②体 | ③隊 | ④対 | ⑤帯 |
| (イ) | シバイ  | ①芝 | ②市 | ③史 | ④誌 | ⑤使 |
| (ウ) | シンパン | ①浸 | ②清 | ③信 | ④辛 | ⑤侵 |
| (エ) | カキワリ | ①書 | ②垣 | ③画 | ④科 | ⑤架 |
| (オ) | イみ   | ①慰 | ②威 | ③忌 | ④違 | ⑤異 |

問二 空欄(甲)、(乙)を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は(甲) 、

(乙)

(甲)

- ① 口論                      ② 取り合い                      ③ つばぜり合い                      ④ 騙し合い                      ⑤ 撃ち合い

(乙)

- ① 潤滑油                      ② アクセント                      ③ パートナー                      ④ 隠れ家                      ⑤ 餌食

問三 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 、(b) 、(c)

- ① とすると                      ② とはいうものの                      ③ 一方                      ④ むろん                      ⑤ なぜなら

問四 空欄  に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

- ① 裁く神  
② 要求の多い神  
③ 救いの神  
④ 不在の神  
⑤ 怒れる神

問五 傍線部A「事後的に構成される」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

- ① 最初の出会いの場面が小説のように感じられること  
② 最初の出会いの場面が世間の目によって確認されること  
③ 最初の出会いの場面が後から錯覚だと気がつくこと  
④ 最初の出会いの場面が後から言葉によって確認されること  
⑤ 最初の出会いの場面が後から世間の目に秘されること



問六 傍線部B「この視線の網の目」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 13

- ① カフェの女主人や客たちの視線
- ② 社長夫人アンヌと工員のシヨーヴァンの視線
- ③ 恋する当人の見張りの視線
- ④ ゴシップやスキャンダル
- ⑤ 恋する当人の視線を中心とした、周囲の人間たちの視線による見張り

問七 傍線部C「ここでは言葉以外の何ものも生起していないと言ってよい」のはなぜか。その説明として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 14

- ① 物語になるより、言葉にとどまるほうが、恋はそのエッセンスを純粹に保つから。
- ② その人の名を呼ぶことが、一瞬のうちに、その人への愛を打ち明けることになるから。
- ③ 言葉はやがて物語になるかもしれず、大きなロマンに発展するかもしれないから。
- ④ 恋愛とは、言葉と恋の境界を行くものであり、言葉と恋の区別はつけられないから。
- ⑤ ある出来事をその意味をまだ知らない状態とその意味を知った状態に分かつから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 15

- ① 恋愛は電話で始まるのが一般的なケースだが、手紙から恋人の身体性を感じる方が恋の実質に近い。
- ② 相手の写真を見ると失望し、そこで恋が終ってしまふ場合が多い。
- ③ きわめて私的な恋愛にも、罪あるものとしてとがめるまなざしという公的な側面がある。
- ④ 恋愛小説を読み耽る人は、小説の中の恋する人と一体化することで危険な綱渡りをする。
- ⑤ 一瞬のうちに燃え上がる恋の場合には、その一瞬を分かち切断の線を入れることができない。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(なお、本文中の※印の語(句)は(注)を参照すること)

機械の知能を測る方法として、チューリングテストという有名な考え方が提案されている。ブール代数とならんでコンピュータの基礎となったチューリングマシンという万能機械の理論を提案した、アラン・チューリング(Alan M. Turing)が、「機械は思考できるか」という問題の考察を試みた。(中略)

さらに、チューリングは、「機械は思考できるか」という問題を一九五〇年というその当時に真剣に議論することは価値のないことではあるが、二〇世紀の末には、大きな意味を持つてくるであろうと予言している。事実、二一世紀を迎えた今、その予言どおりの状況になってきており、あらためてチューリングの卓越した考えに驚かさ<sup>れる</sup>るのである。

チューリングテストは、チューリングが論文を書いた五〇年前当時では、外見や声やその他の感覚的な手がかりを隠すために、<sup>※1</sup> テレイプによる<sup>(7)</sup> ヒツダンで知能を比べるしかなかったのであるが、知能は決して文字によるヒツダン能力だけではないことは明らかである。声を出して会話したり、顔の表情を変えたり、身振り手振りをしたりすることも、重要なコミュニケーションの知能(コミュニケーション能力)である。

従って次のレベルのテストは、<sup>※2</sup> テレイグジスタンスを用いるテストであろう。それは次のような方法である。

テレイグジスタンスのロボットと人間が向かい合って会話をする。テレイグジスタンスロボットは、人間によりテレイグジスタンスされている場合と、コンピュータの人工知能により制御されている場合があるが、テレイグジスタンスロボットと向かい合っている人には、そのどちらであるかは知らされていない。人間がテレイグジスタンスロボットと会話しながら、今話している相手が、他の人間がロボットをテレイグジスタンスで直接制御しているのか、それとも人工知能が制御しているのかを判断する。つまり、ロボットをテレイプがわりに使い、向こう側にいる人間と人工知能の姿を隠し、しかし、その他の動作、表情、声、眼や耳の機能などは、人間と人工知能のそれぞれがテレイグジスタンスロボットに反映される。そして、それを手がかりとして、テレイグジスタンスロボットを分身として使っているのが、果たして人間なのか人工知能なのかを判定するのである。それが、一〇〇パーセントわかれば、ロボットにはまだ行動知能がない、と考えられる。一方、相手が人間なのか、人工知能なのかかわからず、正解率が五〇パーセントレベルになつてしまえば、ロボットが行動においても人間と同等の知能を待った、といえるのである。

この中間段階として音声の認識と理解、そして合成だけで同様のことを行う段階もある。そして現在は、チューリングがいみじくも

述べたように、チューリングの本来の方式であるテレタイプによるヒツダンレベルでは、ほぼ人間と区別しかねるほどの段階に達している。音声なども、そろそろ、そのようなテストを考えてもよいレベルに進歩した。トレイグスタンスが確立し始め、人間型ロボットも登場してきた今、トレイグスタンスを用いるチューリングテストというアイデアも、決して突拍子のないものではないのである。まさに、そのような時代に達しているのであり、このような拡張チューリングテストの考え方を用いれば、将来ロボットが、感情を持ったのか意志を持ったのかもテストできるのである。

さて、そのような背景のもと、他者としてのロボットの設計に戻ろう。他者としてのロボットは、必然的に感情や意志の研究を<sup>(1)</sup>シヨクハツする。従って、その設計指針をよほどしつかり考えないと、危ういことになりかねない。というのは、チャペックが『RUR』で描いてみせたように、せつかくロボットをつくっても、それが結局は人間に対抗するような他者になってしまつてはつくつた意味がまったくないからである。多額の研究費と研究者の英知と労力をかけてつくりあげたロボットが、人間に害を与えるものとなり、後で後悔しても遅い。しかも、その結末が想像の及ばないものであるのならば仕方がないかもしれないが、チャペックを始め多くの人がそれを見抜き警告を発し、技術の側からも、そのようなことが充分予測されているにもかかわらず、そうなのであれば、いかにも残念である。

我が国でも、人間の友として頼りがいのある鉄腕アトムのようなロボットを夢見て模索する動きやそれを支持する人が多いが、あまりにもナイーブに考えていると非常に危険であることも認識しなくてはならない。実際、手塚治虫は鉄腕アトムの話の中でアトムとそっくりの機能を持つが、オメガ因子という感情を組み込んだロボット、アトラスを登場させ、それがありとあらゆる悪の限りをつくす他者として振る舞う様を描いてみせている。

<sup>10</sup>これは、真に卓見といわなければならぬ。アトムのつもりでうっかりアトラスをつくつてしまう危険が常につきまとい、その結果は悲惨なものとなるからである。これまではまだそのような技術は現実のものとなつていないから真剣に論じられてこなかった。しかし、二足歩行ロボットが開発の<sup>(ウ)</sup>シヨにつぎ、ロボットの感情や意志の研究も始まろうとしている現代において、今こそ、われわれは安易にそういう方向を模索すべきではないということを、真摯に考える時がきているのではないか。

他者としてのロボットには、人間に危害を絶対に与えないような知能を持たせなければいけない。すなわち、<sup>11</sup>Xを、まず求めなければいけないのである。(中略)二〇世紀では、チューリングが述べたとおり、このような考えは時期尚早であったが、二一世紀のロボットが、人間の生活の場に入ろうとしている今こそ、この<sup>12</sup>Xが、何よりも優先して本格的に取り組まれなくては

ならないであろう。

( a )、まったく別のアプローチもあり得る。それは、他者としてのロボットではなく、分身としてのロボットを優先して研究開発すべきであるという考え方である。その考えによれば、ロボットは自動車などのアナロジーで考えるべきということになる。ロボットといえども、それはあくまでも機械であり道具であり、自分たちの<sup>※3</sup>エクステンションである。しかも、知的かつ体力的なエクステンションなのだ。

この方向であれば、ロボットの権利などというものは絶対に発生せず、自分たちのつくった存在に脅かされる<sup>(ロ)</sup>キョウイもない。従って、どうやったら自分の分身のロボットをつくることができるか。それが私たちが進むべき、もう一つの道である。勿論その場合でも、ロボットは安全知能を備えていなければならないことはいうまでもない。(1)

介護を例にとって具体的な場面を考えてみよう。例えば、ロボットを自分の身の回りの世話をしてくれるものとして考えたとき、基本的には「他者」であるというのはいささか望ましくない。プライバシーの問題を考えに入れるならば、<sup>(ホ)</sup>キョウキョクには「自分自身」が自分自身を介護するのだからいけない。( b )、ロボットであっても、それが自分の一部であるという分身ロボットであることが望ましい。分身ロボットは、自分の分身として他人を助けたり、自分自身を助けたりする。自分の分身であったなら、身の回りの世話をしてもらっていても遠慮はいらないし、思いどおりになるし、安心でもある。自分の分身であれば、その行動の責任は分身として使用している人間が取ることになるし、その権利は分身を持つ人間の権利であって、ロボットが責任を取ったり権利を要求するようなことはあり得ないのである。(2)

それと同時に、自分の分身ロボットとしてだけでなく身内の人や介護士の人に、ロボットを用いて、様々な仕事を行ってもらうことも可能となる。( c )、別の人にレイグジスタンスしてもらい、自分のそばに来てもらって、介護など手助けをしてもらう場面も多々ある。その時に重要なことは、その人自身が来てくれることが実感できることである。ロボットが世話をしてくれているわけではなく、遠くから、家族や介護士の人からロボットを分身として利用して介護してくれている、という実感である。従って、そのことがはつきりと介護されている人に伝わらなくてはいけない。(3)

あるロボットが誰かに使用されている際、その使用者が明確にわからないといけないことは、自動車などの場合と同じである。そのロボットを運転しているのは誰なのか、その使用者の責任のもとでロボットを動かさなければいけない。自分が自分で動かしているロボットなら思いのままに動いていてもいいが、もし違う人のロボットがそこへ来て動いている場合には、その使用者が誰であるのかと

いうことがつきりわかる必要があるということである。これを、ロボットの「非匿名性」と名づけている。(4)

一般に、分身ロボットの使い方は、ロボットを用いて時間や空間を超えて自分の存在を広げることと、義手のように身体に取り付けたり、盲導犬ロボットのように身体から離しても、自分の一部として利用したりして人間能力の補綴ほてつと拡張を行うことが考えられている。さらに、分身ロボットの将来の利用方法として、自分自身の理解者をつくることが挙げられる。これは極言すれば知性も含めて、いわば自分自身のコピーをつくることといってもいいかもしれない。テレグジスタンスでロボットを使っているうちにロボットが使用者の知性やしぐさを憶えて、その人の生き写しになるというわけである。(5)

言葉や記憶や知識を写すことは、コンピュータでも可能だが、しぐさはロボットでなければ模倣できない。分身ロボットは、分身あるいは伴侶として生活を共にすることにより、人間個人の記録ともなり、それはその人の死後も存在し続けることが可能となる。自分を可愛がってくれた祖父母を偲ぶこともできる。ちょうど、その人の写真、録音した声、ビデオが残ったり、あるいは、その個人の著作や絵画、作曲した音楽が残ったりするのと同じように。分身ロボットの使用範囲は他者としてのロボットより広いともいえるのである。

このように、未来のロボットにとっては、「分身」「非匿名」「安全知能」の三つの技術要素が重要な柱となるであろう。

(注)

- ※1 テレタイプ通信機的一种。送信時はキーボード入力を電気信号に変換して送信し、受信時には入力信号をプリンターにより印字する。
- ※2 テレグジスタンスに離れた所にいる操作者が、あたかも現場で直接作業しているかのようにロボットを遠隔制御する技術。
- ※3 エクステンションに延長。

(出典 舘璋 『ロボット入門―つくる哲学・つかう知恵』より)

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

- |     |        |    |    |    |    |    |
|-----|--------|----|----|----|----|----|
| (ア) | ヒツダン   | ①断 | ②段 | ③暖 | ④弾 | ⑤談 |
| (イ) | シヨクハツ  | ①植 | ②触 | ③殖 | ④嘱 | ⑤職 |
| (ウ) | シヨ     | ①諸 | ②所 | ③初 | ④緒 | ⑤処 |
| (エ) | キヨウイ   | ①移 | ②畏 | ③威 | ④意 | ⑤偉 |
| (オ) | キユウキョク | ①究 | ②窮 | ③及 | ④救 | ⑤糾 |

問二 傍線部A「れる」と文法的意味が同じものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

- ① 聞きたくもないのに、聞かすには居られなかった。
- ② 心静かに味わってみられるがよろしかろう。
- ③ 手柄をさらわれて、とても悔しい思いをした。
- ④ 心の乱れをあらわに見せるのが憚られた。
- ⑤ そんなことがいつまでも続けられるものではない。

問三 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが最も適当か、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

要は、その人の顔が見える、つまり、だれが来てだれがやってきているのかということがわかること、それが極めて大切である。

- ① (1)
- ② (2)
- ③ (3)
- ④ (4)
- ⑤ (5)

- 問四 本文中の空欄（ a ）（ c ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は（ a ）23、（ b ）24、（ c ）25
- ① つまり                      ② ただし                      ③ しかし                      ④ 一方                      ⑤ だから

- 問五 本文中の空欄 X に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 26
- ① 安全知能                      ② 感情や意志                      ③ 他者性                      ④ 認知能力                      ⑤ 自律性

- 問六 傍線部B「これは、真に卓見といわなければならない」とあるが、ここでいう「卓見」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 27
- ① アトラスのようなロボットがもつ悪の側面を過小評価していること。  
② ロボットを生み出す技術の善なる面だけを強調しすぎてしまったこと。  
③ ロボットの本質はアトラスのような悪であることを洞察していたこと。  
④ 社会的状況によってはオメガ因子が悪を生み出すことを理解していたこと。  
⑤ ロボットが人間にとって恐ろしい敵にもなりえると考えていたこと。



問七 傍線部C「あるロボットが誰かに使用されている際、その使用者が明確にわからないといけないことは、自動車などの場合と同じである」とあるが、筆者がこのように述べた理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 28

- ① ロボットの自主性を認めると、使用目的から外れる可能性があるから。
- ② ロボットに、目的にあった義務を課することができないから。
- ③ ロボットが事故を起こした場合、責任問題が浮上してくるから。
- ④ ロボットが本来持つている権利を、守ることができないから。
- ⑤ ロボットが故障した場合、誰が修理するのか明確でないから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 29

- ① 未来のロボット開発に関しては、人間の現場で使用される際に重要となる「非匿名性」を最優先して進めていくことが大切である。
- ② 介護の現場で、介護を受ける人が安心して身を委ねる状態を生み出すと期待できる点に、分身ロボットを開発する意義の一つがある。
- ③ 分身ロボットの存在意義は、その能力が将来の人間の生活にとって本当に役立つかどうかかわからないので、再検討が必要である。
- ④ 人間のしぐさはロボットでなければ模倣できず、他者としてのロボットは、生活を共にする伴侶としてその有効性を大いに発揮する可能性がある。
- ⑤ 人間の能力を拡張する機械としてのロボットに対しては、人間のような感情や意志を持たせない方向で開発を進める必要がある。